安芸家（北小路家）「御産所日記」について

北小路　博央

北小路家には「御産所日記」と題する巻物三巻が現存する。

これは初代安芸守定（一三六〇年代）以来代々足利家の産医をつとめた安芸家当主によって記された足利家産事にかかわる記録であり、室町期に書かれた貴重な古文書（恐らくは原本）とされている。

記録は永享元年（一四二九）より永禄三年（一五六〇）まで百三十年にもわたるもので、この間の安芸家当主は三代守家より九代貞種につながる。

三巻を便宜上、上、中、下に分ける。

上巻は永享元（一四二九）年より嘉吉元年（一四四一）にわたる間十八回に及ぶ御産記録であり、この中殆どが足利六代将軍義教の嫡男義勝（のちの七代将軍）の誕生とこれに関する諸儀式の詳細な記載にあてられている。十八回の御産のうちわけは若君十二人、姫君六人であり、若君には義勝の他、政知、義政（のちの八代将軍）、義観、義視らの名がみられる。医師には守家（安芸家三代）の名が記されている。

中巻には享徳三年（一四五四）より応仁二年（一四六八）にわたる十一回の御産の記録が記され、うちわけは若君三人、姫君八人、若君には義尚（のちの九代将軍）、義植（のちの十代将軍）の名がみられ、義尚誕生の前後の記録には「日野殿御娘」として日野富子の名もみられる。また、医師守宣（安芸家四代）の名もしばしば記されている。

下巻は天文四年（一五三五）より永禄三年（一五六〇）に及び、御産の記録は義輝（のちの十三代将軍）に限られ、医師としては貞家（安芸家七代）の名が記されている。この日記の最後は永禄三年十一月二十一日、貞種（安芸家九代）の相続に関する記録で終っている。

上、中、下全巻を通して、足利家産事に関する諸役の氏名、諸儀式、諸役への拝領品、出産に際して使用する調度品など詳細な記載があるのに比べて、御産所医師の手によ

る記録としては出産に関する医学的経過の記載が全くないことは残念である。当時の産医が出産には直接立合わず、隣室より産婦の容態をきいて投薬等の指示を与えていたことからみると止むを得ないことかもしれない。

室町期の御産所と当時の政治史、生活文化史との関連については「史窗」第二十七号（一九六九年六月）掲載の「『御産所日記』の一考察」の中で満田栄子氏が詳細に記述されており、ここではふれないことにする。

この日記三巻の全文は塙保己一の「群書類従」巻第四百廿におさめられており、前述の満田氏の論文も「群書類従」によって検討を加えられたようである。

当家にある日記の原文と「群書類従」の記載を逐一対比するとその間に興味ある相異点のあることが明らかになった。

即ち「群書…」では原文の上巻中、義勝の記録のほぼ中程における

一、此外度々若君姫君御産之日記〇

二階堂同右筆奉行方ニ可有記録

有不審之子細者彼方ニ可尋申者也

の三行が脱落しており、この三行がそのまま義勝の記録の最後の部分に移されて記載されている。文章としてはその方が意味が通り易くも思えるので、或は保己一が故意に移しかえたとも思える。

次に原文の中巻に当る部分で、四ヶ所にわたり年号または月日に誤った記載がある。即ち寛正三年七月四日姫君誕生のくだりは原文では十四日、寛正九年十月二十七日姫君誕生は原文では五年、寛正七年十二月二十三日若君誕生は原文では十一月、同じく十二月二十二日御所様より下されもの…は原文では二十三日である。

更に下巻に当る部分では義輝誕生に際する諸役氏名の列記において

右筆　　松田丹後守晴秀

御祈禱奉行　千秋左近大夫将監晴秀

の間の「御祓祓役　小林民部少輔国」の名が完全に欠落している。

以上、「群書…」における御産所日記全文を通じて六ヶ所にわたり原文と順序の異なった記載、日付の誤り、字句

の欠落を見出すことができた。同書の他の部分に関する原文との対比については不明であるが、「群書…」のなかでこの種の誤りは稀有なことであろうか。

（結語）

安芸家（北小路家）御産所日記にみられる三十回にわたる足利家産事の記録と安芸家当主とのつながりを述べ、更に「群書類従」におさめられた同日記の全文と原文を逐一対比することにより、六ヶ所にわたる異なった記載、日付の誤り、字句の欠落を指摘、報告した。

（北小路外科医院）

日葡辞書から見た安土桃山時代の医学—

三、身体部位語

亀　節子
大槻　彰・前川久太郎

私達が日常何気なく使っている身体に関する語は、実は、重層的な日本語の構造をそのまま反映したものである。例えば、「歯が痛い」、「口が酸っぱい」、「胃腸の具合が悪い」などといった表現の間に現代人は殆ど差異を見い出さないが、ひとたび、これらの語の起源や伝来に思いを馳せてみるならば、「歯」は古く「Pa」と発音され、共通の意味と語根をウラル語の中に探り当てることが可能であり、「口」は高句麗語の中に「kŏci」（忽次）という類似語を見い出せるものであり、「胃腸」は五臓六腑説と同じく中国より伝来した語であるといったように、それぞれの言語の成立層が全く異なるものであるという事実を推し測る